

樋川 恭子

学校名：横浜市立金沢高校 担当教科：英語科

1. 今回のカンボジア研修における目的やねらい

国際理解教育は、様々な問題を抱える国々の状況を調べることにより、自分たちとは異なった暮らしをしている人々の現状に気づき、自分たちに何ができるかを考え、実際に行動する力を育成することがその活動の大きな柱であると考えます。そのためには、まず私自身が開発途上国であるカンボジアの国際協力の現場を体験し、途上国の現状や開発課題について考え、その経験を子供たちに伝え、問題解決に向けて行動することによってこの取り組みを広げていきたいと思う。

2. 目的やねらいの達成度

- ・内戦後 18 年を経た今もカンボジアが抱える問題は山積されており、その問題は一つ一つ複雑に関連している。人々の生活を、都市、農村、学校、教員養成施設、孤児院、伝統工芸研究所等が目当たりにすることにより、現状を垣間見ることができた。
- ・さまざまな援助団体の存在とその活動を知ることができた。効果的な援助体制を構築するためには、ドナー間の援助協調が必要であり、私たち一人一人がどのような援助活動ができるのかを考える材料となった。
- ・訪問した先々で出会った人々や、同行していただいた人々にいろいろな話を聞くことにより、様々な人とつながることができたことは、私にとってこの研修で得られた財産である。
- ・国際協力の現場を体験することによって、途上国の現状や開発課題について考え、問題解決への行動について考える機会を得られた。これからどのように具体的に生徒に還元していくか、どのような活動が効果的なのか、事前研修で学んだいろいろな方策を応用してみたいと思う。

3. カンボジアから学んだこと

- ・内戦終了後 18 年を経過している現在もその影響は多大である。Good Governance を根幹に、インフラの整備、農業支援、人材育成、民間セクターの開発などが進められているが、課題は多い。特に、ポル・ポト政策により知識層を喪失したことによる社会全体への影響の大きさには驚いた。
- ・教育においては、初等教育の就学率 100%の達成や教員の質の向上、給与水準の向上などが主な課題だが、人材不足、経済、社会インフラの未整備、法の脆弱さ、行政の不透明さ、汚職等の社会全体を取り巻く問題と複雑に絡み合っており、問題解決にはまだ時間を要する。Good Governance がなぜ必要なのかということ、行政面のみならず、様々な場面で実感した。
- ・課題の解決に向けてあらゆる国からさまざまな援助がなされており、円滑な援助体制の構築にはドナー間の協調が必須である。また、時には必要がないといわれてしまう援助もあり、「援助慣れ」という言葉さえが思い浮かんだ。この国のいわゆるエリートの就職先は NGO であり、教育公務員は、給与だけでは生活できず、副職を持つものも少なくない。国の背骨となって支えているのが NGO であるとしたら、その自立への道のりは遠く、援助とは何かについて再考する機会を得た。
- ・教育は、個人のためだけではなく、国民一人一人の資質の向上は、その国の在り方を決定するのであるということを実感した。
- ・先進国に住む人々は世界人口の 20% であり、私たちは少数派であるということ。

4. 研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

事前研修で、以前青年海外協力隊として活躍された経験を持ち、現在は開発教育のファシリテーターをしている方が、「(協力隊としての海外経験の)話を聞いてくれといっても工夫しないとなかなか聞いてもらえない。」という趣旨のことを話されていたことが印象に残っている。研修で得られ

た貴重な体験を、事前研修で学んだ手法を参考に、どのようなことを生徒に伝えたり考えさせたいときに、どのような方法で伝えるのが効果的かを考え、英語の授業、学級活動、総合学習、部活動等の場面で、工夫して活用したいと思う。

5. 研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

・観光旅行では到底訪れることのない施設を訪問したり、知り合うことのない人々と出会って交流ができたこと、そして何よりも、この研修がより深いものになったのは、同じ体験を共有し、意見を交換することができる団員、同行者の方々の存在に負うものである。異校種の先生方の視点は新鮮で、同じものを見ても、異なった視点からの感想は、とても参考になった。

・訪問先で、授業ではなく、日本のことを紹介する活動を行うのもよいのではないかと思う。日本文化の紹介というと、何かの踊りだったり、歌だったりするが、そうではなく、日常の私たちの暮らしぶりを紹介する活動があってもよいように思った。

6. その他研修全般を通じての感想・意見など

とてもよく計画された研修で、ひとつひとつの訪問や交流の意味が深く、もう一度カンボジアへ行っても、同じ場所へ行きたいと思うほどである。現地との密な調整が伺い知れる日程だった。また、現地でも、団員の健康・精神状態などを常に考慮していただき、とてもありがたく思う。

また、前述したように、カンボジアには、多くの国々やNGOの援助が存在することを知り、こんなに多くの人々を途上国の開発援助に携わらせるものは何か、ということにも興味を持った。年配の隊員の方が、若い隊員の方に「早く日本に帰国しないと社会復帰できなくなる。」と冗談交じりに話をしていらしたのを思い出した。日本では、「個性を大切に」などという言葉が使われるようになって久しいが、多様な生き方がまだまだ許容されない社会的なプレッシャーがあるということもひとつの要因なのかも知れないと思った。

途上国の抱える問題といっても、共通点はあっても、千差万別で、今回はカンボジアの一面を見ることができただけだと思う。異なる文化をより知ることによって、ステレオタイプを作ることができなくなるということを身をもって実感した。百聞は一見にしかずとはまさにこのことであり、生徒には日ごろから「外を自分の目で見なくてはいいけない」と言いながら、なかなかその機会を得ることができなかった私には、本当に貴重な体験となった。是非この素晴らしいプログラムを今後も続けていただけるよう、切に願います。

7. 今後の本研修参加者へのアドバイス等

体調管理が一番大切だと思う。そして、現地では、「郷に入れば郷に従う」精神で、まずは、違いを楽しんで受け入れる姿勢が肝要である。また、その時々感じたことやショックを受けたことなど、他の団員と分かち合うことが自分の中で消化していく手助けとなる。心を開いて、周りの人と交流し、その存在に感謝することができれば、研修がより深いものになるように思う。事前準備では、何を見たり聞いたりしたいのか、研修を通して明確にしておく、帰国後の授業で具体的な活用ができるように思う。